

ピリピ人への手紙4章6-7節 「平安を得る秘訣」

1A 思い煩いを捨てる 6

1B 主にある喜び 4

2B 寛容 5

2A 願いを知っていただく 6

1B 感謝

2B 祈り

3A 心と思いを守る神 7

1B 理解を超える神の平安

2B キリスト・イエスにある平安

本文

ピリピ人への手紙4章を開いてください、ついに、私たちの聖書通読の学びは今日で、ピリピ書を終えます。午後礼拝で一節ずつ見ていきます。今朝は、6-7節に注目します。「⁶何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。⁷ そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」

ピリピの教会において、働き人たちの間で意見の対立があり、同じ思いになってほしいと願って、パウロが手紙を書いていることを前から離しています。4章に入りますと、その二人の名前が出てきます。彼女たちに主にあって同じ思いになってくださいと勧めています。それからパウロは、改めて、喜びなさいと勧め、それから、今、読んだところ、思い煩わずに、主に願いを知っていただきなさい、と勧めています。それは、心に平安がなかったからです。そもそも、なぜ意見の対立が起こっているのでしょうか？それは、こうすべきである、ああすべきであるという方法論でぶつかっていたからです。心の根っこに、不安があったので、それで意見や主張として強く出てきました。パウロは、ここで必要なのは、平和の神の支配だと思いました。彼女たちや、その周囲の人々に、平和の神が共におられたら、そこに思いの一致が与えられるだろうと思ったのです。

1A 思い煩いを捨てる 6

パウロは、まず「何も思い煩わない」でいなさい、と勧めます。私たちは、思い煩いや不安への対処として、状況が良くなればそれで不安がなくなると思います。仕事があるのかないのか。生活はやっていけるのかどうか。健康に対する不安もありますね。

では、それで問題を解決するために、社会基盤を良くして、生活も安定させ、いろいろな病に対

して医療技術も発達させれば、不安がなくなるでしょうか？過去の日本と、今の日本の間で比べたら、はるかに今のほうが不安がなくなっているはずですね。ところが、必ずしもそうではありません。自殺がすべて不安から来ているというわけではありませんが、自殺の数を調べると、日本は、戦時中の自殺は減っていますが、戦後、急激に増加し、経済成長と共に増加しています。戦争中、戦争で死ぬ人は多いかもしれませんが、自殺で死ぬ人は少なかったのです。¹

東日本大震災の時、救援活動、復興支援活動に何度となく向かいましたが、おそらくはこの被災地において同じことが起こっていると思いますが、直前の被害が甚大な状態のほうが、むしろ、人々は大変だけれども何とかやっていたと思います。避難所にみな暮らして、自衛隊の人々が助けてくれて、一日一日を精いっぱい生きていました。ところが、やや安定してくると、目に見えない形でいろいろな問題が出てきます。実際の災害よりも、もっと深刻かもしれません。それは、自分の失った人のことを思う余裕ができるため、それで苦しみます。そして仕事も少なくなります。亡くなった人の遺産相続で争いも起こります。成功する人と、取り残される人の格差が広がります。生活が落ち着き、また便利になっていくと、むしろ不安が増えていくのです。

1B 主にある喜び 4

なぜでしょうか？この本文の手前にあるパウロの言葉に、その理由が書かれていると思います。4 節です。「いつも主にあって喜びなさい。」パウロは、ピリピ人への手紙で、主にあって喜ぶことを何度となく勧めています。主がすべてのことを支配しておられることを思って、それで喜ぶ。言い換えると、主がすべてを支配しているのではなく、自分で自分のことを支配しないといけなと思ってしまうのです。自分が主のおられるところに座を設けようとしてしまうことが、不安の原因なのです。ですから、社会が改善すると、生活が安定すると、そこで自分でできることが増えてきます。そこで、自分がやろうとすることが多くなって、いろいろなことに気づかうようになります。

イエス様が、弟子たちにこのことを教えられましたね。山上の垂訓で、「心配したりするのはやめなさい」と言われました(マタイ 6:25)。そこで取り上げておられるのは、空の鳥です。空の鳥と、私たちの違いは、私たち人間は、種蒔きをして、刈り入れをして、倉に納めるという労働をします。しかし、空の鳥は食べることについては、全く、父なる神に依存しています。私たち人間は、神のかたちに造られているので、神と同じように創造的な働きをします。しかし、そこに罪による悲劇があります。創造的な働きをしているのですが、神ご自身ではないのに、神だと思ってしまうことです。自分が全てを支配していると思っているのです。

だから、イエス様は言われます。「6:27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるでしょうか。」いのちを与えるのも取るのも、主ご自身です。生まれる時に、私たちは自分たちの意志でいつ生まれるか決めましたか？そんなこともできない

¹ <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/suicide04/2.html>

のに、いのちが取られることを支配できるわけがありません。けれども、それでも願いますね。自分のからだをサイボーグにしたり、あるいは延命治療したり。この前、終末ケアのことを話し合いましたが、延命治療を願っている人たちは、出席している人たちには一人もいませんでした。日本の調査結果でも、10%以下です。なぜなら、そこに生きていることの尊厳がないからです。けれども、人は何とかして自分で自分を支配しようとし、神のようになろうとします。そこに不安が生まれます。

ですから、神のかたちに造られた者として、創造的な働き、計画を立てる力が与えられている者として、それでも父なる神がおらえて、この方がわたしたちを見てくださっているという信仰を、積極的に働かせなければいけません。それが、イエス様が、神の国と神の義を第一に求めなさいと言われたことであります。そして、ここでは、「思い煩わないで、神に願いを知っていただきなさい」ということであります。信仰を働かせて、あらゆることにおいて、神が父で、私の子なのだとすることを思い出すことです。

2B 寛容 5

そして、もう一つ不安に関わる、パウロの勧めがあります。5 節です、「あなたがたの寛容な心が、すべての人に知られるようにしなさい。」これは、広い心と言ってもいいかもしれませんが。パウロが牢に入れられている時、親衛隊の人たちに福音が広がりました。それでローマでは、励まされて福音を大胆に伝える人たちが起こされましたが、中にはパウロに妬みをもって、宣べ伝えている者たちもいたのです。ところがパウロは、「1:18 見せかけあれ、真実であれ、あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでいきます。」と言っています。なぜ、こうも寛容になることができたのでしょうか？

まず、すべては主が支配しておられ、自分ではないということがあります。次に、5 節には続けて「主は近いのです。」とあることです。これは、主が戻って来られるのが近く、それでこの方が裁かれるのであって、自分が早まって判断する必要はないということです。(I コリント 4:5 参照)

主が支配されて、主が裁かれるのではなく、自分で支配していると思えば、当然、不安が出てきます。この人は自分を苦しめるかもしれない。あの人は自分に悪いことをしてくるかもしれない。あるいは、あの人は悪いことをしているけれども、罰しないと悪をのさばらせてしまう。主のみこころを求めて、主に行動に移すように言われるかもしれませんが、そうでなければ、すべては主の御手にあるのですから、自分で自分を守る必要はないのです。不安になるので、自分で自分を守るとします。鍵がいくらあっても足りないぐらい、自分の心の戸を閉めます。人に対して心が開かれていません。心が狭くなるのは、主にあって守るのではなく、自分で守ろうとしてしまうからです。

2A 願いを知っていただく 6

ですから、自分で自分を支配しようとする力を捨てる必要があります。それが、「思い煩わない」

ということです。であれば、次に、「あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」ということです。

1B 感謝

主に、すべての願いを知ってもらうということです。これは、すばらしい勧めです。自分の愛しておられるお方に、自分の願いを知ってもらうのです。

ここで注意してほしいことは、自分の願い(request)と書いてありますが、自分の要求(demand)と書いていないことです。神に、これこれをしてくださいという時、「もし、このことをしてくださらないならば、私はあなたに、もう従っていきません。」というような態度です。この願いを聞いて下さらなければ、なぜ、あなたがここにおられるのか、あなたが自分に良くしてくださっているのか、分かりません、というような態度で願うのであれば、願っていることにはなりません。ただ神に要求しているだけです。以前、信じたと言っていた女性がいました。再び彼女に会った時に、「祈ったけれども、それがかなえられなかったの、信じるのはやめようと思う。」と言いました。祈っていることが聞かれないならば、どうして信じるに値するのか？ということなのでしょう。けれども、それは要求しているのであって、祈りでも願いでもありません。

願いと要求の違いはなんでしょうか？それが、「感謝をもって」という言葉です。ここにも、再び、主がすべてを支配しておられるという信仰があります。神が主権を持っておられるということを受け入れていることです。どんなことが起こっても、それは神が何らかの意図をもって、お許しになっているから起こっていることであって、神を愛する者、神のご計画に従って召された者たちのために、すべてのことを相働かせて、善にしてくださいということを知っているからです(ロマ 8:28 参照)。この神の良い意図を知っているの、**「あらゆる場合に、感謝をもって」**祈りを献げることができるのです。願うのですが、それは感謝の裏付けがあって祈っています。テサロニケ人に対する、パウロの言葉を思い出してください。第一の手紙です、「5:16-18a いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。」

信仰的に後退してしまっている時、霊的に不調の時に、その人が主に立ち戻れるか、それとも信仰から離れてしまうかの大きな分かれ目が、詩篇 73 篇に隠されています。著者、アサフは、「もしも私が「このままを語ろう」と言っていたなら、きっと私は、あなたの子らの世代を、裏切っていたことだろう。(15 節)」と言っています。もう信仰を捨ててしまうようなことを、言ってしまったことだろうということです。けれども、彼は、その後で信仰を回復しています。彼は、信仰的にすべってしまったとしても、それでも戻ってくることができたのは、初めの言葉に秘訣があります。「まことに、神はいつくしみ深い。(1 節)」ここです、神が良い方であること、いつくしみ深い方であること。神ご自身の善を知っていたので、それで立ち戻ることが出来ました。

神が良い方だと知っているから、感謝できます。神が良い方だと知っているから、あらゆる場合に、そこに神の良い意図があると信じることができ、それで感謝できるのです。

2B 祈り

そして、「**祈りと願い**」によって、神に願いを知っていただきます。祈りの中で、願います。「願い」とは、具体的なことに関わります。「主よ、どうか、すべての貧しい人にパンを与えてください。」というものではないのです。具体的に、どこのだれなのか？知っているかぎりの具体的なことを、願います。イエス様が、祈りなさいと言われた時に、まず、主をあがめるように命じられました。「マタ 6:9-10 天にいます私たちの父よ。御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。」

このように、大きな視野に立って祈るように言われているのに、いきなり次の願いは、「6:11 私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください。」ということです。いきなり、今、自分の目の前に迫った必要のために祈りなさいと言われていています。イエス様の時代、ガリラヤ地方の人たちは、私たちが考える以上にお腹を空かせていました。ですから、私たちはこの祈りは真剣にならないかもしれませんが、彼らにとっては真剣でした。そして、その切実な必要を満たしてくださるように祈る時に、神の御名が聖なるものとされ、御国が、神の支配が、祈りを通して与えられるのです。私たちにとっては日ごとの糧ではないかもしれませんが、日々の切実な必要のため、願いをもって神に知っていただくのです。

3A 心と思いを守る神 7

このように、祈りと願いをもって、神に願いを知ってもらおうと、どうなるでしょうか？神の約束は、これです。「**7 そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。**」

1B 理解を超える神の平安

私たちの祈りが聞かれる時に、それは、自分が思い煩ってしまうような、混乱した状態、困難な状態がなくなるということを意味しません。そのまま、混乱し、困難であることもあります。けれども、必ず聞かれるのが、神の平安なのです。その平安は、問題を無くすのではなく、問題を超える、超越してしまうのです。「**すべての理解を超えた神の平安**」とあります。これは、神が私たちの理解を超えて、働いておられるからです。「イザ 55:8-9 「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。——【主】のことば——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」ですから、私たちが理解できなくとも、神が確実に私たちを運んでくださっていることを、私たちの霊は知っており、それで平安が与えられます。

使徒たちは、このような、一見、矛盾している祝福を書いています。「I ペテ 1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」ことばに言い尽くせない、栄えに満ちた喜びです。ことばを超えてしまっている喜びです。そして、「エペソ 3:19 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。」人知を超えているのに、知ることができるようにと祈っています。人の力や理解を超えたところに、超自然的に私たちに与えられる喜びであり愛なのです。そして、ここピリピ書では、理解できないのに平安が与えられるという約束です。

キリスト者は、とても不思議な存在ですね。二つの一見、相反する感情を抱いています。信仰を持っていない人と全く同じように、喜怒哀楽があります。不安があります。悲しみがあります。落ち込みもあります。それらがなくなるのではありません。しかし、悲しいのに喜んでいます。苦しいのに平安があります。落ち込んでいるのに、希望があります。感情では、信じていない人たちと全く同じなのに、それとは違う、時に正反対の確信が与えられるのです。それは、神からのもの、霊のものだからです。

平安というのは、神のご性質で特別なものです。これは何も、争いがない、混乱が無いということだけを意味していません。神が天地を造られた時に、「創世 1:31 見よ、それは非常に良かった。」とあります。神の栄光が満ちており、秩序があり、豊かさがあり、いのちがあります。全き状態と云っていいでしょう。神が支配されているところには、必ず平安があります。

2B キリスト・イエスにある平安

そして、これはキリスト・イエスにある平安です。「あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」と言っています。イエスご自身が、私たちの心と思いを守ってくださいます。覚えていますか、弟子たちが、イエス様が捕らえられる前に心を騒がせていました。イエス様は、数多くのことばで彼らを慰めました。そして、こう言われます。「16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」イエスがおられるということが、私たちの平安です。この方に会うことが、平安です。この方に、「わたした」と語られることだけで、私たちの心と思いは平安に満たされます。

弟子たちが、ユダヤ人を恐れて戸を閉じている時に、彼らの真ん中に復活のイエスが現れてくださいました。そして、言われます。「ヨハネ 20:21 平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」平安をイエス様は与え、そして世に私たちを遣わしてくださいます。世において、混乱があっても、苦しみがあっても、落ち込みがあっても、しかし、平安によって私たちを守ってくださいます。